

家庭の機能と父親役割[※]

——前エディプスの父親とエディプスの父親概念の検討——

村 尾 泰 弘^{※※}

1 はじめに

家庭における「父親不在」が指摘されるようになって久しいが、我々は最近ますます父親の問題を考えざるを得なくなった。週休2日制が導入され、それが家庭内に少なからず影響を与えるようになったからである。かつて猛烈サラリーマンは「仕事」を口実に家庭の問題を母親まかせにしてきたが、時代は変わり、もはや父親は仕事に逃げられなくなった。それどころか長時間の週末をどう過ごしてよいかわからない。居場所がない。父親が家庭にとっての「困り者」である場合、その悪影響は家庭にいる時間が増えた分だけ家庭に直接かぶさってくる。

我々は日常の臨床のなかで父親の問題を避けて通れなくなったのである。

2 問題の所在

近年の心理臨床の関心の焦点は、母子関係、特に早期母子関係に集中している感がある。それにくらべて父親の問題を直接扱う研究は意外に少なく、臨床のなかで父親の問題を指摘する場合でも「父親の心理的な不在」などといった、画一的、形式的な指摘で終わることが多い。父親の問題は何かと問われた場合でも同様であり、きわめて形式的な返答しかできない場合が少なくない。

今まで指摘されてきた「父親の不在」がはたして現在の家庭問題の核心なのであろうか。もし不在だけが問題であるのなら、父親が家庭におさまれば、それで問題は解決するはずである。

問題は、父親が家庭内でどう役割をとってよいのかわからないことにあるのではないだろうか。

つまり、父親の役割の混乱が問題であると考えられるのである。

それでは、父親の役割とは一体何なのであろうか。

S. フロイトのエディプス・コンプレックス理論から考えると、父親機能とは、子どもに道

※The father role on family function

※※Yasuhiro MURAO 立正大学社会福祉学部人間福祉学科

キーワード：父親役割、前エディプスの父親、エディプスの父親、非行、家庭の機能

徳観念や社会性をもたらすことであり、もっと厳格に言えば、子どもと母親との母子の癒着を切り離し、父親的な権威を通して健全な超自我を形成することにあると考えられる。

一般に、この父親の役割を論じる場合、父親の権威の問題が注目されることが多い。ところが、現代は、父親の権威が失墜したという見方が一般的になってきている。

かつて父親といえば、「地震、雷、火事、親父」という表現からも窺われるように「頑固親父」というイメージが即座に浮かんだが、この権威の失墜によって父親イメージはきわめて曖昧になってしまったのである。

第二次世界大戦後、日本は民法の改正により家制度が廃止され、さらにその後の目覚ましい女性の社会進出により「男は仕事、女は家庭」という構図が失われた。そのような社会情勢の中で、父親は制度の上でも家長たる権威を失い、職業人、収入の稼ぎ手としての権威ももたなくなっている。

速水洋は、そもそも「民主主義的価値理念」「男女平等思想」などの現代の社会理念そのものが、この父親の権威を危うくする社会背景となっているのだと指摘する。つまり、父親が勝手に家の事を決めてしまおうなら「民主主義」的ではないと非難され、妻に対して「口出しをするな」などと言おうものなら「男女平等の原理」に反するとそしられるのである。

このような現実のなかにおいて、父親の役割を把握することは非常に難しくなっているといえる。

本研究では、父親の権威の失墜という社会問題を踏まえながら、具体的レベルで父親の役割を検討することを目的としたい。

3 強盗致傷を起こしたAの事例

<事件の概要>

パチンコ屋で金を使い果たしたA（16歳）は、弱そうな男（被害者、大学生）を見つけて恐喝をすることを思い立ち、被害者に声をかけたが無視されたので立腹。被害者の背中を殴って転倒させた。抗議した被害者に対して見境なく殴る蹴るの暴力を加えて、被害者から無理やり強奪し、被害者に傷害を与えた事件である。

Aはさらに同じ日のうちに2回の恐喝を重ねている。家庭裁判所調査官（以下、調査官という。このケースは筆者がかつて家庭裁判所調査官として接したものである）が少年鑑別所で初めてAと会ったときの印象は、まさに意外というしかない。体は大きいのだが、終始オドオドし、これが粗暴犯なのかと呆れるくらいであった。この事件は、成人であれば「無期又は7年以上の懲役」に相当する罪であることを説明すると、Aは体中を震わせ始めた。調査官は、まずこの小心さと、強盗致傷という内容のアンバランスさに驚かされた。

<家庭状況>

Aの家族構成は、父、母、姉、Aの4人家族。

母(43歳、パート看護婦、高卒)は支配的で過干渉。姉(17歳、高校3年生)もやはり過干渉。一方、父(45歳、会社員、大卒)は口べたで家庭内での発言力は弱く、そのうえ3年前から単身赴任をしており家庭を離れている。

いわゆる母親優位、女性優位の家庭であることが窺われる。

Aは、母や姉の「心配性で過干渉な態度」に不満があると述べた。

母は「Aは要領が悪いので、つい先走って注意してしまう」と言い、そんな母のことを口うるさく感じ、「自分をいつまでも子供扱いにしている」と訴えた。

<生育史>

Aの父母はAの誕生の2年前に結婚。

A誕生の1年前に姉が生まれた。

昭和*年2月、Aが誕生。当時、母は仕事をしていなかった。Aは2年間、幼稚園に通園。

小学校時代は、「ごく普通の気の弱い甘えん坊。親に従順で手のかからない子だった(母)。」

母はAが8歳の4月からパートで看護婦をするが、翌年8月に辞めた。

Aは小4頃から野球をするようになる。ピッチャーや一塁手として活躍。野球に打ち込んだ。「運動はできるほうだった。(A)」

一方、父は仕事に忙しく、帰宅も遅く、家族との接触は乏しかった。

母はAが11歳の4月からパート看護婦の仕事についた(午前中だけの勤務)。

Aは中学に入学。野球部に入部し、部活動で野球をするとともに少年野球も続けた。

野球部と少年野球の両立が難しくなったため、中2の12月に少年野球の方はやめた。ただし野球部は3年間続けた。

Aが中2頃から、父は単身赴任となり家庭を離れた。

Aは中2の終わり頃から、いわゆるつっぱり風の格好を好むようになった。

中3の1学期頃から授業エスケープなどが始まった。

「授業エスケープといっても、友人と悪ふざけをしている程度だった。高校へは進学したかった。(A)」

「本当はS高校へ進学したかったが、無理といわれ、T高校へ進学することにした。しかし、後で、自分より成績の悪い者がS高校へ行くのを知って、しゃくだった。(A)」

中学を卒業。同年4月、S高校へ進学。

入学後1週間で休みがちとなり、6月に入ってから登校しなくなった。

6月10日頃から夜遊びが激しくなる。

6月14日、今回の事件を起こす。

6月19日、逮捕。6月30日少年鑑別所に入った。

<面接経過>

7月20日までの間に少年鑑別所において、Aと3回の面接を行い、その間、父母と2回の面接を行った。

調査官としては、初回面接で受けた印象、すなわち、強盗致傷という粗暴かつ悪質な事案と、Aのオドオドした小心さの、ある種のアンバランスさに驚きを覚え、彼がなぜこのような事件を起こすに至ったかを理解することに努めた。

Aは中2頃から、いわゆるつっぱりの態度をとり始めたという。それはちょうど父親が単身赴任で家庭を離れた時期と一致している。

「母親も姉も口うるさいことばかり言って」と、Aは母と姉の過干渉な態度に不満を訴えた。母に言わせれば、「Aは要領が悪いので、つい先走って注意してしまう」ということになるのだが、Aはそんな母のことを口うるさく感じ、「俺のことをいつまでもガキ扱いにしている」と悔しそうに訴えた。

父親のいない家庭は、「オンナ、オンナしていて(A)」、母と姉を中心に「あれをしたら危ない、とか、そんなことをしてるからうまくいかないとか、(家庭は)何でも女っぽい考えで動き(A)」、そんな子供扱いをする母と姉に対して、Aは「精一杯いきがって、つっぱって反抗するようになった(A)」。

母親は、このAの反抗に一人で当惑を深めたという。筆者との面接中、その話題になると母親はさかんに夫(父親)を非難し始めた。

「こういうことには、父親の対応が必要なのに、この人(父)は単身赴任で家にいない。だいたいこの人は肝心なときにはいつも家にいないんです。単身赴任前は仕事仕事で家にいない。相談しても、ああとか、うんとか、なまくらな返事ばかりして、結局は、いつも頼りにならないんです。」と父親を非難する。「私が一人でどれだけ苦しんできたことか………注意すれば、『うるせー、ガキ扱いすんな』で、黙っていれば、どんどん好き勝手なことをし始めるし………どうしていいか分からずに一人で苦しんできたんです。」

このように父を非難する母の横で、父親の方はただただ黙って頷くばかりであった。

しかし、調査官には父親の胸の内にはそれなりの言い分もあるかと思い、母親に席を外してもらい、父親と二人で話をする、父親は次のように話し始めた。

「家庭内に居場所がないんですよね。単身赴任の前も、私は仕事仕事で家にはただ寝にかえるだけのような生活をしていましたので、いつのまにか家庭のことに口を挟めなくなっていたんです。例えば、あいつ(A)のことを厳しく叱ろうとすると女房の方が妙にそれをかばうんですね。何か私が口出しをしようすると、女房がそれをさえぎるというか………そんなこんなで、いつのまにか家のことにあんまり口出しをしなくなったというか、今となっては弁解ですが………」

このように母親は「頼りにならない夫(父親)」といい、父親は「口出しをさせない妻(母親)」と弁解する。ここには夫婦の連携がまったく機能していないことが如実に表れている。

一方、このような状況の中でAは高校に進学したが、そのつっぱりの態度が災いして年長者から目を付けられ、「電車の中で睨まれたり駅で殴られるようになった(A)」という。そのためにイライラした気持ちの中で今回の事件を起こしてしまったというのである。

いわば不安定な心理状況の中で今回の事件を起こしてしまったと言えるが、調査官とAとのラポールが深まるにつれて、Aはさらにその複雑な心境を語り始めた。

「学校に来ないっていう連絡が親のところにあって、母親は、なんで学校に行かないのって、ギャーギャー言うし……僕だって行きたかったですよ。(調査官『そうなの』) 行きたかったですよ。でも先輩が怖くて行けないなんて、格好悪くて言えないですよ。

(調査官『どうして』) やっぱ、つっぱってるから。(調査官『で、お母さんにはなんて言ってたの』) かったるいから行きたくねえんだよって。(調査官『じゃあ、先輩からいじめられてるのは、お母さんは知らなかったわけね』) お母さんも学校も知らなかったと思います。(A)」

つまり、Aは学校に行きたいが、先輩が怖くて行けない。しかし、つっぱっている手前、そんな弱さを母親には見せられない。相談もできない。そんな危機的な心理状態の中で今回の事件を起こしたのである。

このAの事例に示されるように、現代では父親機能の弱い家庭の非行が目立ってきている。

その典型を挙げると、ひとつは、いわゆる社会性の未熟な粗暴非行。つまり、父親の社会性付与の機能がうまく作用しないために、規範意識が形成不全となり、怖いもの知らずの傍若無人な態度をとるのである。

二つ目は母子密着の強さから、完全に母親に支配され、一種の心理的な窒息状態から、シンナーなどにのめり込んでしまう薬物耽溺型の非行である。

4 事例の考察

(1) 家庭内の力動関係(強い母の孤立という悲劇)

Aの家庭では、父親が適切に機能しなかったといえるが、この家庭の場合、Aの父はどのように機能すれば良かったのだろうか。この家庭に必要な父親の機能とは、具体的にどのようなものであったのであろうか。その点を考察してみたい。

Aの家庭では、母親が強く支配的な存在と受け止められがちである。しかし、実際は、母は決して強くはないのである。本研究では、そのことを特に強調し説明を加えたい。

母親は父親のことを「頼りにならない」「相談のしがない」などと軽視し、拒絶するようになった。そのために母親はますます家庭の中で支配的にならざるを得なくなったのだが、その一方で母親は心理的にはいっそう不安定になっていったことに注目しなければならない。

母親は、父親が「頼りにならない」ために、父親を拒絶して家庭外に排除していく。このことは、逆に母親の孤立を深め、内面的な支えを失うことにほかならない。

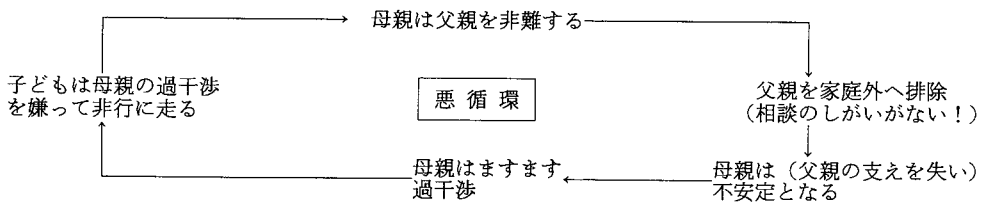
父親を侮蔑すればするほど母親は孤立し、内面的に不安定になっていくのである。したがっ

て、母親は一見強そうに見えるが、その内面は不安定そのものなのである。そのためにますます心配性になり過干渉な態度を強めていったのである。

この家族の機能不全は家庭からの父親の排除と母親の不安定化の悪循環として理解される。

支配的な母親は父親を「頼りにならない」として侮蔑して家庭外へ排除する（父親の排除）。母親はいつそう支配的となるが、内面的な支えを失い、内面的な不安定さは増大する（母親の不安定さの増大）。母親は不安定さを補償しようとして、ますます子供を支配下に取り込み過干渉に接する（母親による子供の私物化）。母親の過干渉を拒否して非行に走る。母親は父親を「頼りにならない」として家庭外へ排除する。

図示すると次のようになる。



このような悪循環の図式の中で非行が現れることは、臨床の中で頻繁に認められる。

(2) 非行の意味と父親役割

さてここでAの非行の意味を考えてみたい。

Aの非行の家族（特に母親）へのメッセージは「子ども扱いするな」「一人前の男として扱え」というものである。そして、家庭が「オンナ、オンナして」「何でも女っぽい考えで動」いていることに対して、過度に男性性を強調しようとしたものと理解することができる。ところが、この「男性性」「男らしさ」に対して、Aは、ある種の取り違いを起こしたことに注目したい。

Aは「男らしさ」を強調しようとしたのだが、彼には「男らしさ」がどのようなものか理解できなかったといえる。なぜなら、困ったことに父親が男性としてのモデルになりえなかったからである。そこでAはある錯覚に陥ってしまった。つまり、Aは「男らしさ」と「乱暴」を取り違えたのである。

「乱暴になること」と「男らしさ」は違うはずである。ところがAは「乱暴になること」と「男らしくなること」を勘違いした。そして、Aはどんどん乱暴になっていった……このことがある種の風を起こし、前述の悪循環の風車（かざぐるま）をくるくると回したということになるのである。

5 現実の夫の軽視と強い夫への依存願望

Aの家庭のような、父親が排除されていく家庭においては、父親はどのように機能すればよいのだろうか。文字どおり「強さ」を表す努力が必要だったと考えればよいのだろうか。

しかし、現代では速水の指摘を待つまでもなく、妻が強い夫に従属していくという夫婦の形態は時代の流れのなかで崩壊しつつあるといえる。ただし、妻が単に夫のリーダーシップを拒否しているだけかという点、それほど単純ではない。

本事例のなかでも、妻(母親)は夫(父親)について「頼りにならない」「相談のしがいがない」として夫を拒否しつつも、「頼りにしたい人物」「相談したい人物」として調査官に非常に強い依存心を向けてきていることに注目したい。

このことは、言葉を換えれば、現実の生活レベルでは夫のリーダーシップを拒否しつつも、内面では「強い夫」に依存したいという、きわめてアンバランスな心性があると考えられる。

家庭裁判所で夫婦の離婚調停事件などを扱うと、このことはもっとはっきりする。現代の夫婦関係においては、妻は意識上では絶対に夫に負けたくないという姿勢をとりつつ、無意識レベルでは「強い夫」に依存したいという強い願望があり、これらが乖離していることがしばしば認められるからである。これらを考えると、この点、すなわち、妻の心の中には、絶対に夫には負けたくないという気持ち(意識)と「強い夫」に依存したいという気持ち(無意識)が共存し、それらが乖離しているところに、現代の夫婦関係の一つの特徴があるのではないかとさえ考えられるのである。

それではどのように父親が機能すればよいのであろうか。

6 母親を支え助ける機能

R. J. ストローラーは前エディプス期における父親の重要な機能を次のように述べている。

- (1) 母親を支え、助ける機能
- (2) 報酬と懲罰により子どもの行動を直接的に修正する機能
- (3) 同一化のモデルとしての父親の機能—これは男子にとって特に重要となる。
- (4) 愛情対象としての父親の機能—これは女子にとって特に重要となる。

本研究では、この中の「母親を助け支える機能」と「同一化のモデルとしての父親の役割」に注目したい。

Aの家庭には、まさしく父親の「母を助け支える機能」、母をサポートする機能が必要だったと考えられる。すなわち母親の不安定化をくい止め安定化させる機能である。

核家族化が進む現代家庭においては、直接育児に携わる母親は孤立しがちである。父親はその協力体制の核にならねばならないのである。

母親にとって、妊娠、出産は一種の危機的場面である。そこでは母親は心身ともに不安定に

ならざるをえず、それを支えてくれる存在が必要となる。

ここで夫がその要求に応えられるかどうか、その後の夫婦関係、家族関係を大きく左右する。すなわちこの時期に夫婦としての信頼関係を樹立できるかどうか、その後の信頼関係に大きな影響を与えると考えられるのである。

このように考えると、父親の役割というものにはエディプス・コンプレックスの時期に突然現れるものではないことが理解できる。まさしく妻の妊娠、出産と共に父親機能は行使されなくてはならず、ちょうど、子どもの人格形成の上で早期の養育状況が多大な影響を及ぼすように、父親機能が家族のなかで適切に機能するには、妊娠、出産の時期からの早期の関わりでの成就の正否が大きな鍵になるといえよう。

夫婦は通常は恋人時代、新婚時代、妊娠、出産という順を踏むが、恋人時代にお互いに自分の理想像を相手に投影していたものが、現実の夫婦の関わりの中で、現実と理想のギャップが自覚されてくる。つまり幻滅過程が進む訳だが、ちょうど出産、育児の時期とこの幻滅の時期が重なり合い、いわば相乗効果を及ぼして夫に対する拒否感が醸成されることが少なくないように思われる。

また、「非行の意味と父親役割」で記述したように、この少年にとって父親は「同一化のモデル」として充分機能していない。このことは思春期のいわゆるアイデンティティを確立する時期にひとつの問題となったといえよう。

以上のようなことから、エディプス期における父親の役割の重要性はもちろんのことから、本研究では、早期の父親の役割、言い換えれば前エディプス的父親役割の必要性を強調し、なかでも、とりわけ父親の「母を助け支える機能」の必要性を強調しておきたい。

7 前エディプス的父親とエディプス的父親

M. マーラーは前エディプス期の父親について言及し、再接近期に、父親は子どもにとって重要な直接的対象となると指摘している。すなわち「母親との分離と一体感を自由に体験することの大切なこの時期に、母親の側の分離不安が強くて子どものこの心の動きにうまく応じてやれないと、子どもの分離個体化の発達に困難が生ずる。母親の分離不安を解決するために、父親は大きな支えであるし、密着した母子関係を自然に切るためにも父親の存在が必要である。さらに母親から離れていった子どもにとって新しい基地としても、父親は重要である」という。

また、E. アベリンは、「微笑反応などで始まる父との関係は、母親や同胞に対するのに比べてやや遅れるが、母親に対してと同じ共生期に始まり、分化期には父親への愛情を増し、練習期には父親に特別の感情を向けるようになる」「練習期には父親は幼児の外界への探索活動の高まりを体現している非母性的存在となる」「練習期の終わり頃から再接近期には、母親との関係は両価性に満ちたものになっていくが、父親との関係は母親とのアンビバレンスを解決す

るのに必要な愛情対象であり続ける」と指摘する。

P. ブロスも、前エディプス期のいわゆる二者期の父と息子の良好な関係の重要性を指摘し、これは陰性エディプス・コンプレックスという否定的な言葉で片づけてはいけないものであり、この時期の父子関係が今まで過小評価されてきたことを非難している。

これらを考え合わせると、エディプス期と前エディプス期では父親の役割に差があること、前エディプス期の父親役割が過小評価される傾向があったことなどが窺われる。

男子に限定してみると、エディプス期の父親は敵対するものとして立ちただかり、母子関係を断ち切るものとしての様相が強いが、これと比較すると、前エディプス期の父親は、子どもが良好な感情を向ける対象であり、母子関係を断ち切るものというよりは、密着した母子関係の中から、子どもを外界へ「引っ張り出す」存在と考えられる。

したがって、父親は子どもの発達段階に応じて、関わり方が変化すると考えた方が矛盾が少ない。

まず良好な父子関係があり、信頼関係が樹立された上で、エディプス的な父親、すなわち権威者として立ちただかる存在として現出するべきものと考えられるのではないだろうか。

本研究では前エディプス的な父親の役割機能を重視し、とりわけ、その父親の機能を中心として、母親を支え安定化する機能を強調したい。

8 あらためて父親の権威とは

父親の権威的な態度は、現代の風潮に合わないのではないかとこのことであったが、ここで、少し違った角度から問いを投げかけてみたい。

現代の父親の権威の低下とは、要するに、妻に対する夫の問題に他ならないのではないか。つまり、夫婦間の力関係の問題にすぎないのではないか。簡単に言えば、妻に対して夫が弱くなっただけであり、それと子どもに対して父親が権威をもてなくなるということは無関係ではないかということである。

我々は妻に対する夫の権威と、子どもに対する父親の権威というものをどこかで混同したり、取り違えたりしてきたのではないだろうか。

夫が妻に対して権威になることは「男女平等思想」から非難されうることである。しかし、親が子どもに対して権威を持つことは、民主主義とも男女平等思想とも抵触しないことなのである。

アベリンによれば、父親はgender identityだけでなく、generation identityをも育て、促していくという。その意味からも、父親は「年長者」としての誇りと力をもって子どもに向かい合うべきであろうし、「大人」として「子ども」にたいして権威を持つべきであろう。この見地から父親の権威をとらえなおしてみてもはどうだろうか。

エディプス期に至った子どもに対しては、父親は社会の代表として、大人の代表として、子

どもに立ち向かわなければならない。子ども発達課題として、権威の内在化、社会性の形成は必要なものであろう。

父親が子どもに対して権威を行使できない原因をもう少し深く考えてみると、それは父親側だけの問題ではなく、母親側にも存在していることが分かる。父親については前述したように父親は家族の中で信頼を得ていなければ権威を行使しても効果がないということである。

もう一方、すなわち母親側の問題は何かというと、父親が子どもに対して権威的に接すると、それを母親が自分に対して権威的に振る舞っていると受け取り、それを拒否する傾向が認められることである。つまり、子どもに対する夫の権威を妻が許さないのである。

この原因としては母親自身の自立が未熟であることが挙げられる。

このことは、先に述べた現代の夫婦の特徴、すなわち妻の心の中には、夫に絶対に負けたくない願望（意識）と「強い夫」に依存したい願望（無意識）が共存し、乖離している現象と関係がある。

この絶対に夫に負けたくない気持ちは、長年の女性差別に対する補償作用と理解したい。つまり、それだけ女性差別が激しかったという証ともいえる。夫の権威を妻が許さないのは同じ理由からであると考えられる。したがってこの傾向は過渡的な現象とも理解されうる。すなわち、さらに社会が女性の自立を認め、女性自身が自立していくことで解消されうる可能性がある。現実の個々の生活においては母親（妻）が、無意識的な「強い夫」への幻想的な依存を自覚し（意識化し）、克服することが必要であろう。そして、夫婦がお互いに平等なパートナーとして人格を認め合い協力体制を作り上げることが求められる。そういう基盤の上で初めて父親が子どもに対し健全なリーダーシップを行使できるのではないだろうか。

本研究では、子どもの出生早期からの、父親の「母親を助け支える機能」というものにもっと注目すべきではないかと指摘してきた。父親の役割をこの「母親を助け支える機能」を中心に考えるならば、それは、家庭の調整役、安全弁としての父親の姿である。さらに付言すれば、それは母親の情緒を安定化させる、調整機能としての父親の姿であり、家族全体を一つの生体とみれば、外界と内界をつなぐ「自我機能としての父親」の姿である。このような見地から、現代に見合った新しい父親の役割を再考することも可能ではないだろうか。

L. ベラックは自我の機能を次のように分類している。

(1)現実検討 (2)判断 (3)現実感 (4)思考過程 (5)自律的な自我機能 (6)刺激防壁 (7)欲動、感情の統御と調整

このような機能の類推から父親の機能を考察することの可能性を問題提起しておきたい。

参考文献

- (1) Abelin, E. 1971 "The role of the father in the separation-individuation process," in J. B. McDavitt & C.F. Settledge (eds.), Separation-Individuation
- (2) Abelin, E. 1975 "Some further observations and comments on the earliest role of the

- father," Int. J. Psycho-Anal., 56.
- (3) Abelin, E. 1977 "Panel contribution on the role of the father, in the preoedipal years,"
Sixty-sixth Annual Meeting of the Am. Psychoanal. Ass.
- (4) Blos, P. 1985 SON AND FATHER : BEYOND THE OEDIPUS COMPLEX Macmillan
Company, Inc. New York (ピーター・ブロス「息子と父親 エディプス・コンプレックス論をこえて
青年期臨床の精神分析」児玉憲典訳 誠信書房 1990年)
- (5) 深津千賀子 1992 「自我機能」(氏原他 編「心理臨床大事典」培風館 976-977)
- (6) 速水洋 1992 「父親の機能—父親権威の衰退とその帰結」(馬場謙一他 編「父親の深層」有斐
閣)
- (7) 柏木恵子 1993 「父親の発達心理学」川島書店
- (8) 河合隼雄 1994 「日本社会とジェンダー」(河合隼雄著作集10) 岩波書店
- (9) Stoller, R. J. 1977 "Panel contribution on the role of the father, in the preoedipal years,"
Sixty-sixth Annual Meeting of the Am. Psychoanal. Ass.
- (10) 館哲朗 1992 「父親の病理—人格発達における父親の役割」(馬場謙一他 編「父親の深層」有斐
閣)